

---

# 魔法少女リリカルなのは ～転生者によるIFな物語～

黒い鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～転生者によるIFな物語～

### 【Nコード】

N4580Z

### 【作者名】

黒い鳥

### 【あらすじ】

【魔法少女リリカルなのは ～転生者による狂い物語～】のIFの世界での話……だったが、何やら前作の世界と繋がっている様子。そしてそんな世界に転生した原作非介入派である少女の前に現れた、最高の魔導師。その二人の話。

## 一話 彼女は転生者（前書き）

何となく思いついたので投稿しました。

たんに思いつき小説なため、超不定期更新になります。  
ある意味、続編ですね。

## 一話 彼女は転生者

腰まで届くであろう焦げ茶色の髪を持つ少女、うきなるはるか浮鳴遥は転生者である。

よくあるテンプレな方法で死に、テンプレに能力を貰い、テンプレにリリカルな世界に転生してきた元高校生の少女。現在は小学三年生。

「はあ……」

一つに纏められたポニーテイルが溜息と共に揺れる。

前世と同じ容姿で生まれ、前世と同じ両親から生まれたが、生まれた世界は前世とは違う。

リリカルでマジカルな世界なのだ。

そりゃあ、テレビの向こう側で見ている分には楽しめたが、実の世界となると話が変わってくる。

もしかしたらあっさりと死んでしまいかもしれない世界なのだ。

実のところ、彼女の隣の席の生徒は、主人公高町なのはである。

全転生者が欲したのであるう席を、彼女は手に入れたのである。

しかし彼女からすればまったく嬉しくないこと。

原作非介入派である彼女からして見れば、あまりにも嫌な席である。

ちらり、と高町なのはを見る。

すると目が合い、笑顔に向けてきた。

一応、こちらも笑顔を向ける。

内心、恐怖しながら。

そもそも遙は高町なのとは言う存在に怯えているのだ。  
何故、あれほどまでに裏無く人間に優しい心で接する事ができるのか。

人間、人を救おうとする気持ちがある場合、絶対に自身の利益を考  
えるものだ。

しかし彼女は九歳の癖して自身の利益など考えることなく、助けを  
求めてきた少年のために、友達となる少女のために、世界のために  
動いたのだ。

「……………」

そんな美しか存在しないような少女を、遙は人間とは思えないのだ。  
九歳児と言う純粹なお年頃だから？ 嘘だ。九歳児ならもつと我侷  
を言っている時期だ。

「……………はぁ」

他人のために自己犠牲をする。

それは衛宮士郎と同じようなものだ。しかも才能がある分、なお性  
質が悪い。

「まあ、私が関わらないところでマジカルしてね」

息しか吐いていないようなほどの音量で呟いた。

屋上で一人、弁当を食べていたところ。

別に友達が居ないと言っわけではなく、食事のときは静かに食べたのだ。

だが、その静寂な時間に 独りの少年が現れた。

「やつほー。転生者」

翡翠色の髪と眠たげな真紅の半眼を持つ少年が、彼女の前に訪れたのだ。

一話 彼女は転生者（後書き）

主人公は浮鳴遥さん。

十話も無いと思います。多分。

## 二話 彼は魔導師

さて、遥の容姿を語ってみよう。

まず原作主人公達に劣らないほどの美少女である。前世ではかなりモテたが、本人は興味なかったので『年齢〃彼氏居ない歴』に彼女は当てはまる。

もともと『恋愛感情など一時の気の迷いによる精神的な病の一種に過ぎない』と言うモットーを掲げる彼女なのだから、彼氏が出来た――なんて喜んでいる友人を見て思わず苦笑してしまうほどだ。

次に、髪。

焦げ茶色の、腰まで届く綺麗な髪をポニーテールに纏めている。

次に、瞳。

大きく理知的な真紅の瞳である。

そんな彼女の前に

「……………」

真紅の瞳を持つ少年が現れた。

顔立ちは整っている方。イケメンとまではいえないが、カッコいい部類に入る顔である。

しかし、思わず目に付いてしまうのは、その瞳。

自分と同じ真紅の瞳だ。

その瞳からは卑しい感情や見下したようなモノは感じられず、ただ観察しているかのような目である。



「……………」

しかも、彼女の事を転生者と言ってきたのだ。  
つまり彼は転生者の部類に入るのである。それはわかる。  
だが、こう言った唐突な接触到、彼女はどうすれば良いのか頭を悩ませていた。

「……それで、貴方は何者かしら？」

転生者と呼んできた以上、誤魔化しは効かないであろう。  
多分、彼は転生者などを知る事ができる能力持ちだ。  
そう推察したと同時に、彼に質問した。

「オレ？ オレはお前の隣のクラスの彼方行方だが」  
かなたゆくえ

試すような笑みを浮かべながら、あっさりと名前を明かしてきた少年  
彼方行方。

「私も自己紹介したほうが良いかしら？」  
「どちらでも」

すでに知られている。

「浮鳴遥よ。よろしくね」  
「ああ。よろしく」

余裕そうな声音。  
余裕そうな表情。  
接触してきた意図は？  
何故こんな時間に？

そう言った事を冷静に考えていく。  
あまり得意ではない魔法。その部類に入る並列思考マルチタスクを全力で使い、相手に気づかれぬ短い時間で考える。

「ふむ。別にそこまで考える必要は無いぜ」

「……何が？」

「不得意なマルチタスクを使ってまで考えなくて良い、って意味だよ」

「」

一瞬、世界が止まった。

そう錯覚してしまうほどの驚愕を彼女は感じた。

絶句なんて生易しいものではない。多分、脳味噌の動きが止まったのである。

そう考えてしまうほどの言葉であった。

「……ん？」

ふと、行方が疑問を感じたような声を出した。  
そして納得したかのような声音で、

「ああ。能力無効化系能力者か」  
ブレイカースキルホルダー

「まあね」

彼女のスキルによって能力スキルを無力化した。

その瞬間、彼は確認をしてきた。

つまり今まで知る事ができていたが、能力を無力化された瞬間に知る事ができなくなった。

それだけわかれば、すぐに理解できた。

「もしかして、彼方君の能力って解析系？」

「そうだな。よくわかったな」

「……………」

不信感が高まる。

能力を封じられたのに、余裕そうな表情と声音は変わらない。  
だから、質問を変えてみた。

「……魔法の方にも自身があるの？」

「そうだな。能力も強力なものだが、魔法も原作の主人公達以上だ  
ぜ」

「……どのくらい？」

スベルマスタ  
「他称、最高の魔導師」

はつきし言おう。

彼女のスキルの無効化スキルでは、魔法までは封じられない。  
故に、魔法の強度を聞いてみた。そして、後悔した。

「それで、用件は？」

「ああ。用件は」

行方がそう言ったと同時に、結界を展開した。

苦々しい表情をしたと同時に、遥は 消えた。

テレポート  
「……空間移動？」

結界を閉じ、溜息を吐いた。

「……誤解されたか。抹消されると思われたか？」

周りと隔離するために展開した結界により、逆に警戒されたか。そう行方は考え、

「ま、どうでも良いか」

そう言って彼は教室へと戻っていった。

「思わず逃げてきちゃったけど……もう少し居た方が良かったかしら」

軽率な行動だったか、そう考えたが……相手の手札が分からない以上、逃げてきてよかったのかもしれない。こちらはまだ内容 相手の目的を聞いていない状態で逃げてきたのだ。

なら、良い感情は抱かれないであろうが、だからと言って敵として見られないはずだ。

そう考え、新しい手札を作ることにした。

「午後からの授業は適当に参加するしかないか……」

何気に小学校生活を楽しく送っている彼女からして見れば、この出会いは面倒臭いことであった。

## 二話 彼は魔導師（後書き）

一話一話が短い？ まあ、それは見逃してください。

### 三話 転生者は疲労する

行方と出会ってから三ヶ月。

あれから彼方行方は何もしてこなかった。直接的にも間接的にも。普通に隣のクラスなので見かけるし、すれ違ったりするが、完全に他人面である。

もしかしてあんな時間、本当は無かったのでは？　と考えてしまうほどだった。

用意しておいた切り札が無駄になった感じだ。

しかし、彼が接触してきたおかげで自分がとことん魔法に対し弱いと言うことを教えられた。

我流であるが、少しそっち方面に鍛えてみようか？　そう考えることが出来たことには感謝する。

「ま、あの時、逃げたのは失敗だったみたいだけど……」

転生者を排除するのが彼の目的だった場合、すでに遥は殺されているはずなのだ。

普通な生活を送っている遥には隙が多く、いつでも殺せただけだ。

だが、行方は先程言ったとおり何もしてこない。

つまり、行方には暴力的な目的があったわけではないのだ。

普通に用件を聞けばよかったかしら？　と少し後悔する。

「……よく考えれば、彼以外にも転生者はこの学校に居る可能性があるのよね」

一度調べた方が良く、と思い新たな手札を作ることにした。

「……ふむ」

一方、行方の方とは言う、遥以上の悩みの種が出来てしまい、悩んでいた。

彼の悩みの種となるものはもちろん、転生者である。

その転生者は一ヶ月ほど前に地球に現れた。

それだけなら別に脳を使うほどでもなかった。単なる転生者程度なら、何が起ころうと解決できるからである。それだけの手札を彼は持っているからである。

逆に言うと、持っていない手札の範囲で起きたことには非常に弱いのだが。

事実、遥を見つけたときには彼は一年ほどかけて彼女に対しての手札を作り、そして接触したのだ。

あまりにも酷い反則技チートさにどうすれば良いのか、と言う思考をしていたのだ。

「あゝあ。また酷い反則野郎チートが出てきちゃったよ」

自室のイスに座り、背もたれに寄りかかりながら溜息を吐く。

原作開始まであと一年と少し。

遥と同じく原作非介入派である彼は、彼女と接触して同盟を組もうとしたのだが……用件を伝える前に逃げられてしまった。

その放課後に出会った転生者やら、一ヶ月ほど前に現れた転生者やらで彼女と接触する時間がなくなってしまったのだ。いや、しつこく接するのもどうかと思い、時間を置いた、と言う点もあるのだが。しつこく接すれば、ストーカー扱いされるかもしれないし。そんな適当なことを考えた後に作業に戻る。

「さてと……依頼されたものぐらいはしっかりと造らなくちゃな」

今、彼が作っているのは一ヶ月ほど前に現れた転生者に頼まれた物品。名は、『零時迷子』。

本来の『零時迷子』は“存在の力”と言うものを毎晩午前零時にその宿主が消耗した“存在の力”を元に戻し回復させる一種の永久機関である。

しかしこの行方作の『零時迷子』は違い、“存在の力”の代わりに魔力を回復させる物である。

宿主の魔力情報を解析し、毎晩午前零時に『零時迷子』から同じ波長の魔力を増幅させる、と言う仕組みである。

「まったく……何をやってんだか。オレは」

原作に介入しないと決めときながら、原作以外で起こる事柄に対しては首を突っ込む。

原作でなければ安全？　んなわけない。

結局のところ、彼はお人よし　でもない。

ただ単に流されやすい人間なのである。

情に流されるのならまだ良いが、その場で流されてしまう。

そんな自分に溜息を吐いた後、作業に戻った。



「まあ原作には絶対に介入しないけどな」

行方が幼い頃にこちらに転移してきたときに養子に向かい入れてくれた男性のことを考える。

彼のためにも迷惑になるような行動は控えようと考えたのだ。

それでも転生者と関わってしまうのは、転生者だからかもしれないが。

「…………ふああ。眠い。寝よ」

作業を中断し、ベッドに身体を預ける。

子供の身体であれば疲労が溜まり、眠らずにはいられない。

平行世界の彼とは違い、まだ人間らしい日常を彼は送っていた。

翌日。

腕輪型のデバイスを身に付けながら学校に登校した。

「まったく……放課後も他の世界に行って素材集めしに行かなくちゃいけないぜ」

『お疲れ様です。マスター』

右腕に付けた彼のデバイス、ドラウプニル 略称ニルが行方を労う。

デバイスを持ち歩いている理由は簡単で、ただ単に話し相手が欲しかったからである。

かなりの人間不信者である彼はと言うと、信用できる人間が少ないため、話し相手が少ないのだ。

ありとあらゆるモノを分析できる彼の瞳スキル 構成解析により、相手の思考や感情なども読めてしまう。この能力により、相手の能力や魔力の動きなども見る事が出来る。

故に、遥が魔法を苦手としていた事を見抜いたのだ。魔力の動きが鈍かったから、苦手だと理解できたのだ。

「あ、行方先輩。おはようございます」  
「ん？」

後ろから挨拶されたので振り向く。  
そこには

「ああ。お前か」

三ヶ月前に彼の前に現れた転生者が居た。

「なんか、お前に先輩だ何て言われるの……奇妙な感じなんだが」  
「いやいや、あっちの世界でも僕は貴方より後に転生してきましたし」

クックック、と特徴的な笑い方をする転生者を見つめ溜息を吐く。

「もっとも、あっちの世界とは少し性格が変わっているようだけだな」

「まあ、色々あったんですよ。色々」

今日も遥は屋上の隅で一人、弁当を突いていた。

最近、隣の某悪魔さんが一緒に食べない？ と誘ってきているが、

「私、独りで食べる方が好きなの。ごめんなさいね」

と言って諦めてもらっているのだ。

内心、どこの厨二病だよおおおおお！！……とか叫びながら屋上に向かっている。

それが彼女の日常であつた。

そんな彼女の日常に、また影が差した。

「やつほー。転生者さん」

ついに来たか、と思い顔を上げると　そこには、彼方ではなく少女が立っていた。

どこか皮肉を感じさせないシニカルな笑みを浮べている、長い銀髪に翡翠の瞳を持つ美少女。

背からして一年生だと思われる。

「……………」

予想外な自体が発生した。

そんなふうに関が混乱している中、彼女は自己紹介を始めた。

「初めまして、僕は」



### 三話 転生者は疲労する（後書き）

姿や見た目、口調も多少変わってしまいましたが、彼女が登場しました！

……え？ 誰だつて？ まあ一人称でわかるんでは無いでしょうか？  
それではこの辺で。

現在までに出てきた転生者：四人

#### 四話 彼方より来た転生者

「僕は、キール・ローレイって名前なんだ。よろしく、浮鳴先輩」  
リアル僕っ娘が現れた。

「……………」

いや、そんなことはどうでも良い。  
単に個性的な少女が目の前に現れただけだ。  
問題なのは、個性<sup>ボクっこ</sup>ではない。問題なのは、目の前に現れた転生者<sup>トリッパ</sup>である。

明らかに転生者であろう彼女は……あれ？　もしかして男の子？  
え？　もしかして髪が長く、さらには容姿が美少女な少年だったりする？

下の服装をしてみるが、スカートの下にズボンが見える。  
スパッツ代わりとも言えなくも無いが、彼／彼女の一人称を聞く限り、男物のパンツを隠すためのズボンとしか思えない。  
いや、だったら何故スカートを穿くんのだ？

「……………」

何てかなり失礼なことを考えている遥であつたが、キールの方はただ苦笑するだけである。

「やれやれ、前世から男子か女子か、何て困惑させることがよくあつたが、せつかくの美少女容姿になのに困惑している表情を見ると、

さすがに僕でも少し傷付くよ」

「あ、ごめんなさい」

思考放棄。

素直に謝り、今度こそ（多分）彼女への対策を考える。

転生者　それだけでも脳を働かせなくてはいけない存在だ。

敵味方関係なく、転生者と言う存在自体がイレギュラーであるから考えなくてはいけない。

しかしキールの方はと言うと、その真剣な表情を浮かばせている遙を見て、

「別に警戒する事はないよ。行方先輩もそうだけど、僕達の役目はもう終わっている。だから、僕達は原作に関する全ての事象については警戒しないでくれ」

「……どう言う意味かしら？」

「そのままの意味だよ。原作介入を狙い他の転生者を抹消しようとする愚かな転生者達とは違う、と言う意味だよ。だから君に害意を与える気も無いし、悪影響を与える訳でもない」

「……………」

「……………」

「……………」

ライアーカット  
事実口異

ここで、キールが発言した内容がどれだけ真実かどうかを見抜くために彼女は能力スキルを使った。内容は、虚偽の部分だけ頭から無くす、と言う能力である。

「……………」

そしてスキルの結果　全てが真実である事がわかった。  
故に、彼女は怪訝な表情をさせた。

『行方先輩もそうだけど、僕達の役目はもう終わっている』

「……出番って、どう言う意味かしら？　まだ原作は始まっていないのに」

「簡単な話だよ。僕達は……っ……っ……っ……っ……」

唐突に言葉を止めてしまったキールに対し、またもや怪訝な表情をしてしまう。

キールの方も、驚いた表情をしながら喉に手を当てている。

「……ふむ。悪いが言えないみたいだ」

「そう」

スキルで確かめているため、言葉に偽りが無い事を知る事ができた。

「それで、貴方達の目的は？」

「何。簡単な話さ」

クックック、と喉を鳴らすような笑いをした後、

「同盟を組みたいのさ。現在は僕と行方先輩だけだけど」

……同盟？

「何の同盟かしら？　そもそも、同盟なんて組む必要なんてあるのかしら？」

「まず、転生者に関しての情報が得られる」



「ごめんなさい。私、転生者とかにも興味ないの。平和に暮らせれば」

そう、転生者とか何だとか最近彼女の周りが忙しいが、結局のところ、彼女は平和に暮らしたいのだ。だから原作に関わるつもりも無いし、転生者にも関わるつもりも無い。

「そう？　だけど、その平和を手に入れるには　A'sを乗り越えなくちゃいけないよ？」

「……A's」

「そう。蒐集が行われる時期だ」

「何で私に関係あるのかしら？　自慢じゃないけど、私はBランクも魔力値が無いわ」

「確かに、自慢じゃないね」

クッククク、と喉を鳴らすような笑いをする。

皮肉や嘲笑、見下しの類では無いことはスキルを使わなくてもわかる。

「違うよ。正直言つて、転生者ほくたちからしてみればヴォルケンリッターなんて目じゃないよ。警戒すべき存在は、僕達と同じ転生者そんざいだ」

「A'sで転生者達が暴走するの？」

「さあ？　そこまでは言わないよ」

「……………」

詐欺師と話している感覚に陥る。

どこまでが本当で、どこまでが嘘か。

「え？」

いつの間にか、事実口異が使えなくなっていた。  
何故？ どうして？

そう思考を巡らせるが、答えは出てこない。

「貴方、何をしたの？」

「ちよつとした能力で君の能力を封じたのさ」

「……………」

能力を無効化する能力を発動してみるが、現状は変わらない。  
何が起こっているか理解できない。

「それで、同盟に入るのかい？」

「……その同盟の目的は何なのかしら？」

「簡単だよ。原作介入を求めない転生者同士で助け合う同盟だよ」

「……本当にそれだけかしら？」

「……………」

ただ笑みを浮べるだけでキールは何も言わなかった。

「……却下するわ」

「そうかい。それじゃ行方先輩にも伝えておくよ」

「ええ。お願いね」

そう言つてキールは去つていった。

「……戯言ね」

弁当箱を片付け、教室へ戻つていった。

そして一年後の無印で、同盟を組んでおかなかった事に後悔する事になる。

「はあ……はあ……」

偶々手に入れてしまったジュエルシールドが、こんなことになるとは……。

そう思い、溜息を吐きそうになる。  
だからと言って状況は変わらない。

「あら？ もうへばったの？」

突如、目の前に紫色交じりの銀髪の少女が現れた。  
へばった……それは当たり前だ。

「何よこの異空間……さつさと解除しなさいよ！」

夜の街道が永遠と続いている。

その終わらぬ道を、遥はずっと彷徨っていたのだ。  
目の前の少女によって作られた異空間の中を。

「ごめんなさいね。だけど、これも必要な事なの」

優しい笑みを浮かべながら、赤い瞳を鈍く光らせた。  
遥を異空間に閉じた相手は笑いながら、自身のウサ耳をぴよーぴよこと動かした。



#### 四話 彼方より来た転生者（後書き）

作者です。活動報告にも書きましたが、何故自分のところには感想が来ないのだろうか？ そう悩み続けている毎日です。

レベルが低いのか？ それよも面倒臭いのか？

色々と悩ましながら毎日を過ごしています。前作でもこんな話をした一日ぐらいは来たりしましたが、すぐに感想が来なくなりました。

良い部分とか悪い部分とか、指摘すら来ないので何にもわからなくて……。

主観的と客観的の違いですね。

何故来ないのだろう……。

作者が何か悪いのだろうか……。

ネガティブ

…… マイナス思考ですみません。

それではこの辺で。

## 五話 彼女の原作直前

この一年間、平和な日々が続いた。

魔導師だとか転生者だとか、そんな単語が出てきそうにない日々を送った。

だけど、それでも我流であるが魔法を鍛えてみている。

自身が魔法に対して弱すぎる、と言うことを彼女は自覚している。

故に少しでも対策を作るよう鍛えてみているのだが……そこまで成果は無かった。

もっとも、C＋ランクからBランクには上がったが。

「……んっ！」

腕を天に向かって伸ばし、背を伸ばす。

背中からパキパキと心地の良い音が鳴る。

朝から寝相を悪くして寝ていたことにより背中の状態に奇妙な感覚を感じていたのだ。

九歳で背骨が悪くなる、とか絶望的なことにはならないように寝る前に気をつけようと誓ったのだ。

そんなことを誓っているうちに、チラホラと一年生が見えてきた。初々しく、少しソワソワしている。

「今年は何組になるのかしらねえ」

今日は私立聖祥大学付属小学校の入学式である。つまり遥の小学三年生生活の始まりの日でもある。

彼女が原作の舞台である聖祥に入学した理由は単純で、大学まで続いているからである。

この海鳴市には大学が聖祥以外存在せず、かなり遠いところにある。故に、エスカレーター式の学校に入学してしまったのだ。学力は必要だが。

「ええつと……うん。またなのはちゃん達と同じクラスか」

三年間同じクラスである主人公の名前を見つけ、溜息を吐く。

依然、転生者である彼方行方は同じクラスにならない。アチラで何か細工しているとは思えない。

自身もそう言った能力があればよかった、と悔いながらも自身の教室へ向かう。

席は名前順なので、相島結城君あいじま ゆうきと中端黒兎君なかつはし いくとにはさまれる事になる。隣の席の子が月村である時点で、彼女は諦めていた。

ホームルーム  
そしてHRの時間。

いつもなら自己紹介の時間なのだが、今日は少し違った。

「みなさん。今日は新しいお友達の紹介しますね」

その担任の言葉に浮鳴はギョツとした。

原作開始直前で 転入生が現れるなんて、転生者として考えられなかった。

そして遥の予想は的中。

銀髪銀目のイケメンな少年が入ってきた。おかしいことに、まだ小学三年生と言う幼い年頃なのに、イケメンと言う造形がすでに完成している。

そんな少年が微笑んだ瞬間

「初めまして。今日転入してきた中島貴樹です。なかじまたかきよろしく」

クラス中の女子が頬を紅潮させた。

『ニコポ』『撫でポ』

恋愛系洗脳能力。

微笑んでも相手の頭を撫でて異性から高い好意を得られる、という能力。

これが効かないのは、すでに異性に好意を抱いている者が、もしくは転生者が。

転生者である遙には通じず、彼女は少し引いていた。

男子勢の幾割が嫉妬の対象として見ていた。多分、好きであった少女が頬を紅潮させたことに気づいたのだろう。

「やってらんねー」

思わず口を悪くしてまで呟いてしまった。

昼休み。

いつも昼食の時に使っている屋上は中島と女子達で占領されてしまっている。遙は珍しく中庭で食事する事にした。

何故、彼女が中庭にあまり行かないと言うと……

「……ん？ 珍しいな。お前が来るなんて」



「もしかしたら初めてなんじゃない？　彼女が来るのは」

彼方行方とキール・ローレライが居るからだ。

キールの噂は聞いており、外国人だが日本語ペラペラ。しかも社交的な性格でクラスの中心のようだ。先生からも優等生と認められている彼女だが、よく一年上の彼方行方とよく話している姿を見かけるとか。それも中庭でよく昼食を一緒に取っている姿を見かけているとか。

人気はあるが、そこに恋愛が絡んでくることは無いらしい。

遙は計算しながらの振る舞いなのでは？　と考えているが、まあ恋愛発展にならないような振る舞い以外は彼女自身の性格が起因しているであろう、と結論付けていた。

閑話休題。

「一緒に良いかしら？」

「構わないが」

二人に近寄り、彼女は座って弁当を広げた。

「今日、中島貴樹って転生者が現れたんだけど、貴方達は把握していた？」

「……………」

その言葉に、少し驚いたような表情をした。

しかし二人とも種類の違う驚き方をしている。

行方の方は中島貴樹と言う名前に。キールの方は転生者と言う言葉に。

「彼、『ニコポ』や『撫でポ』を持っていたけど……」

「え？ それは本当かい？」

「ああ。それは知っていた」

二人の反応は先程から違い、キールの方は知らず、行方の方は知っていたようだ。

そのことに遥は違和感を感じた。

「……先輩。もしかしてすでに中島と接触していたのかい？」

「まあね。ちよつとした不可侵条約を張ったんだが……まさか転入してくると思わなかった」

ライアーカット  
事実口異を使用しながら話を聞いているので、彼等が嘘を吐いていないことがわかる。

「だけど、彼は『ニコポ』と『撫でポ』なんて持っていただろうか」

「いや、は持っていなかった。の不安要素が関与している

んだと思う」

「なるほどね」

ところどころ、彼等の会話が聞こえなかった部分があった。

声が小さかったとかそんなものではなく、何かによって知覚することとを遮られたと言う感じであった。

遥にはこの現象に身に覚えがあり、前回のキールも彼女の前では話せなかった内容があった。

それと同じだろうと結論付け、質問しなかった。

「……どうやら貴方達、彼のことをよく知っているようね」

「まあね。からの付き合いだし」

「もつとも、もそこまでの付き合いは無かったがな」

聞こえない部分があったりと、奇妙な感覚に陥る。

「……一つだけ質問」

「ん？」

「彼は貴方達の同盟に……」

「いや、入っていない。思いつきり原作介入する気だしな」  
「そう」

それで会話を終了させた。

昼休みも後半に入ったので、さっさと弁当の中身を片付ける事にした。

五話 彼女の原作直前（後書き）

今回登場した転生者：五人

六話 彼の原作直前……彼女の能力（前書き）

暴力的な戦いはあまりないだろうけど、能力同士の戦いはありそうになってきました。暴力はいけないもんねっ！

## 六話 彼の原作直前……彼女の能力

翡翠の髪を持つ少年、行方は考える。

昼間に転生者の一人である遙に聞いた、中島貴樹が転入してきたことに関してだ。

中島貴樹に関してはすでに確認済みで、彼の能力も把握している。

名前：中島貴樹

魔力：SSS

能力：『五属制御』エレメンタルハンド 『ニコポ』 『撫でポ』

『炎』 『電』 『氷』 プラス『水』 と『風』 の変換資質を持つ能力五属制御。エレメンタルハンド

さらには恋愛系洗脳能力であるニコポや撫でポ。

そして魔力値SSSにイケメンと言う、ある意味テンプレな少年。知りたくも無いが、彼については結構行方は知っていた。

かなりの下種野郎であることを。

「……………」

そんな彼に行方は、原作主人公達なのはを売ったのだ。

自分は介入するつもりは無いから、彼女をどうにしても別に構わない、と。

つまり、中島を下種だとしたら、行方は外道なのだ。

これが物語であつたら、凄いアンチが来そうだな、などと行方は適当なことを考えたり。

「ふむ。だが……さすがに予想外だったな」

中島が転入する事をまったく考えていなかった。  
いや、考えられなくもなかったはずなのだが……それは無いかな、  
と無意識のうちに思考停止してしまっていたのだ。

「ま、気にすることは無いか」

予想できなかった だからなんだ？

百戦錬磨くまんとの最高スベルの魔導師が、力しろうとだけの屑に負けるわけがない。高慢  
ではなく傲慢でもなく、単なる実体験。

例え最強シムシムクの魔導師が百人現れようと、彼は勝てる自身がある。  
そしてそれだけの魔力・技術・経験・能力を保持している。

別に予想する意味が無い事を悔いても意味が無い。  
だからあっさりと考える事を変える。やはり考える内容は、浮鳴遥  
に関して。

『マスター』

「ん？ 何だ。ニル」

唐突に彼のデバイスが話しかけてきた。

『遥さんの能力は何なのでしょう？』

「……あれ。言っていなかったっけ？」

『はい』

自身のデバイスに言っていなかったことに違和感を覚えながら、彼  
女の能力を説明する。

「浮鳴の能力は スキルを作るスキルだ」  
『スキルを作るスキル……それはつまり、神様のような能力では？』  
「まあ、才能を作る能力とも言えるしな。名付けるなら、『スキルメイカー 想造力』か？」

想っただけで力を創造する能力、スキルメイカー 想造力。

「アイツの能力はそれこそ反則級だ。だからアイツのステータス能力値の中で魔法系数値がかなり低かったんだよ」

浮鳴遥はその能力が強力な分、魔法に関しての能力値がかなり低い。魔力値はBアレ以上は上がらないだろう。そう行方は予測している。使える魔法も少ない。例えば行方が干渉したとしても、そこまで変わることはないと考えている。

「もっとも、魔法だけが弱点じゃないけどな」

『と、言うത്？』

「製造時間も必要だし、スキルによっては環境や時間、題名や条件などが必要になってくるしな」

全能な能力、と言うわけではないのだ。

「オレがアイツを勧誘する理由は、そんな強力な能力を持っているからだよ」

『まあ、確かに彼女の能力は凄いですが……』

「そう。確かにあいつの能力は凄い。凄いからこそ オレは警戒する」

『……………』

「まるで、核爆弾かのようなほどの存在だろ？ アイツ」



能力が目当てで彼女を欲しているのではない。

ブラックボックス

彼女が爆弾のようなほど、何が起るかわからない存在だから監視下に置こうとしているのだ。

馬鹿な人間に取られたり、嵌められたりして強力な能力を渡してしまふ危険性だってあるのだ。

『ですが、遥さんは至って理知的です。彼女がそうそう騙されることは無いと思うんですが？』

「洗脳とかあるんだぜ？」

『その時はマスターが解けば良いのでは？』

「随時オレが近くに居るわけでもないし、そもそもオレを含めた転生者達は全員 『万華鏡写輪眼』 の【神魂命】<sup>かみむすび</sup>によって強力な幻術を掛けられているしな」

『……………』

とある転生者が持つ瞳術【神魂命】<sup>かみむすび</sup>の前では転生者であろうが、最高であろうが、最強であろうが……誰にも勝つことが出来ない。いや、勝つとかそんな話ではない。

「唯一、アイツはオレの敵ではないことは確かだが」

『そうですね。そもそも、原作知識が無い方でしたし』

「前世が前世だ。そもそも【リリカルなのは】すらない無い世界から来たんだから」

さすがの行方も、何が何だかわからなくなるような世界であった。もつとも、この世界はすでに行方が知っている【魔法少女リリカルなのは】の世界ではない事だけは確かであったが。

《助けて》

「……そう言えば、もう原作開始なのよね。忘れていたわ」

そして、原作が始まる。

あらゆる不安要素を含んで。

## 六話 彼の原作直前……彼女の能力（後書き）

名前：浮鳴遥（うきなる はるか）

性別：女

魔力：Bランク

スキルメイカー

能力：想造力

ライフゼロ

無効脛：スキルを無効化するスキル。作中では行方に使用。

アリバイプロック

腑罪証明：どんな場所にも居ることが出来るスキル。作中では行

方の目の前で使用。

ライアーカット

事実口異：真実以外の言葉を除外するスキル。作中ではキールに使用。

## 七話 彼女は白いウサギ

原作が始まった。

そのことに關して遙は、ただ事實を受け止めたただけであつた。考へていることは、出来るだけ巻き込まれないようにしよう、と言ふ逃げの思考であつた。

そのための能力。戦闘にあまりにも特化していない能力を神から貰ひ、そして転生してきたのだ。

何が第二の人生を手に入れてまで痛い思ひをしなくてはいけないんだ。

二次創作とか出てくるオリ主達の思考が理解できない。

運命を変えて幸せな未来にする？

馬鹿馬鹿しい。ヒールってこ中二病はさつさと卒業しろ。

結局やっていることは他人を救ふ事ではなく、自身の自己満足だ。

そんな愚痴を口から漏らさず、内心で吐きながら今後のことを考える。

どこにでも行ける、居れるアリバイブロック腑罪証明に、どんな能力でも無力化できる

無効脛ライフゼロ、あらゆる病氣を操り応用で傷さえも治すことさえ出来る

ファイブフォークス  
五本の病爪、相手の視界と同じ光景を見ることが出来、相手の考へラていることがわかる欲視力、相手の言つた真実以外を除外できる事  
イアーカット  
実口異。

あらゆる能力を創造し、例え巻き込まれてもすぐに脱せられるよう手札を用意してきた。

巻き込まれないようにするのも大切だが、巻き込まれた場合どれだけ早く脱せるかも考へなくてはいけないのだ。

それほど十分に手札を持ち、さあ原作に巻き込まれないよう今日は早く帰り、ユーノからの念話が来ないよう結界を張ってから一日を終えよう。

そう考えていたのに

「……………」

親からお遣いを頼まれ、外に出ていた遙は偶然にも、原作に出ていなかったジュエルシードを拾ってしまった。

拾った瞬間、しまったと気づき捨てようかと思ったが、もしかしたらいつか暴走して遙自身が危ない目に遭うかも知れない、と考える日の朝にでも主人公の机の中に入れておこう、と決めたのだ。

そして、帰宅しようとしていた道で　ウサギと出会った。

「……………うさぎ？」

真っ白い毛並みを持つ真っ赤な瞳のウサギが、彼女の目の前に現れたのだ。

そして彼女の目を数秒ほど見つめたほど、どこかへ飛び跳ねていつてしまった。

「こんな街中で、うさぎと会うとは」

原作にはウサギなんて出てこなかったもので、これはリリカルとは関係ないだろうと決め付け帰路に戻った。しかし、歩いているうちに気がついた。

人が居ない。

「……………」

ウサギと出会った辺りから人を見かけなくなった。

もうすぐ夜だが、それでもまだ太陽は橙色である。つまりいつもの街の人達が居る時間なのだ。  
なのに、居ない。

「……………封時結界？」

術者が許可した者や、結界に進入できるもの以外との空間位相をずらす魔法。

それをいつの間にか喰らっていた。

「……………」

これを行った人物の候補として行方が頭に浮かんだが、決め付けはしなかった。

他の転生者が、自分がジュエルシードを手に入れた事を見たのかもしれないし、もしかしたらフェイト達が現れたのかもしれない。

前者なら全速力で逃げるが、後者ならジュエルシードを渡してしまおう。

そう考え、少しの間待っていたのだが……

「……………誰も現れないわね」

異常なほどに静かな世界と化している。

待つのが面倒臭くなったので、結界の終点を目指して歩き始める。もしかしたら誰かが見張っているかもしれないので、能力を使用せずに歩き始める。

そして数分後。

「駄目ね」

まっすぐ歩いてみたものの、結界の壁にすら当たる事はなかった。結界を視認することは出来ているが、どうにも辿りつく感じがしない。

遠近法とかそんなものではなく……もっと違うものを感じる。

「……………」

風景に違和感を感じたので、買い物袋から卵を一つ取り出し下に落としてみる。

置いたのではなく落としたので、当然割れた。

それを見届けてから、彼女はまっすぐ歩き始めた。

「……………」

そして数分経ったが、卵が割れた地点に戻ってきてしまっていた。

「なるほど。そう言う類のものね」

術者は対象者の前に現れず、対象者の精神や体力を消費させていく。そう言う類の術だと考察した。

普通の道ならば【A・B・C】であるが、この術の効果により【A・B・A】となってしまうているのだ。永遠と終わる事のない道筋  
「だけど、私には通じないわ」

自身が持つアリバイブロック腑罪証明により、結界の中であろうとなんであろうと、どんな場所に行ける。つまり永遠と終わらない空間からあっさりと抜け出せるのだが

「……………あ、あれ？」

アリバイブロック腑罪証明が発動しなかった。  
そのことにより、初めて遙は動揺した。本当の意味で出られなくなってしまうのだ。

「……………」

すでにこれが原作とは関係ないことには気づいている。  
しかし、相手がどんな能力を使っているかわからないのだ。  
結界と彼女の能力を無力化している能力は、また別物なのであろう事を推測している。

結界の所為で人々が居なくなり、予測であるが……幻術系の力により永遠の道を作られており、そして何かの能力で無力化されている。

「……………」

何故、自分がこんなことに巻き込まれているか考える。

転生者だから？ ジュエルシードを拾ったから？

こんなことなら、行方達かれらと同盟を組んでおけば良かったと後悔する。  
最高の魔導師を自称する行方なら、少なくとも魔法の腕には自身が



あることが伺えるからである。

「さっさと出てきなさいよ。何が目的なのよ」

しょうがないので、正々堂々出てきてもらうことにした。  
幻術使い相手に正々堂々も無いかもしれないが。

しかし、相手は反応を示してくれた。

「……………」

建物の物陰から白いウサギが出てきた。  
一時間ほど前に見かけたウサギだ。

「え？」

だが、出てきたのはウサギだけじゃない。  
大きな満月が突如現れ、夜となったのだ。

「くすくす」

しかもウサギがありえない笑い方をした。  
明らかに、使い魔だ。

「……出来れば、人型の姿になってくれないかしら」  
「別に良いけど、きつと貴方、驚くわよ」

ウサギが遙の目を見た瞬間、ウサギの姿が消えてしまった。  
そして 背後に気配。

「初めまして」

背後を振り向く。

そこには、光の加減によっては紫色交じりにも見える白銀の長髪を腰まで伸ばした、赤き瞳を持つ少女が街灯の上に座り込んでいる。服装は女子高生が着る様なもので、ブレザー＋ミニスカートである。そして、綺麗な髪の上からウサギの耳が生えている。

その姿を見て、遙は自身がすごい表情で驚愕していることに自覚しながらも、それでも驚かずにはいらなかった。

「鈴仙・優曇華院・イナバよ。鈴仙って呼びなさい？」

そして、危険だと思った。

## 七話 彼女は白いウサギ（後書き）

この小説ではリジェティカ・エイルツスを出すつもりはありません。いつか出す作品で出すつもりです。

## 八話 彼女の原作介入

「はぁ……はぁ……」

遙は屈みながら、乱れた息を整えていた。

髪の毛も乱れていたがそちらに集中がいかず、そのままの状態で移動を始めた。

その代わりにポニーテイルのためのゴムを解き、ストレートにする。顔見知り自身の姿を特定されたくないために家でしか外さないゴムを外したのだ。

「なんなのよ一体……」

すでに結界は解除されており、ウサギの使い魔は目の前から居なくなっていた。

そして、遙が拾ったジュエルシードも、無くなっていた。言ってしまうえば、奪われてしまったのだ。

「……………」

敵は幻術使い。

いつの間にか奪われ、いつの間にか目の前から消えていて、いつの間にか結界が無くなっていた。

彼女が長時間結界を維持してまですぐに奪わなかった理由はわからない。

推測だが、能力が使えないかどうかの確認をするまで現れるつもりが無かったのであろう。

だが、遙が能力による脱出を図ったが失敗したのを視認して、前に現れたのだろう。

そして奪われ結果が解かれた後に、遙は全速力でその場から逃げた。文字通り逃げた。能力とか考えられず、逃げた。

相手は使い魔。

戦闘はもちろん出来るだろうし、幻術を見抜く能力だって思いつかない。

遙の想像力スキルメイカーは何の能力でも作れるわけではない。

規定・空間・場合など、色々な規則を以て能力を作ることが出来る。

逆に言うと、条件外のものになると能力を製作できない。

そして、幻術と遙の相性は悪かった。

ただそれだけのことだ。故に、幻術対策がまったく出来ないのだ。

「あゝあ。嫌になるわね……」

空は本当に暗くなっていた。

幻の夜空ではなく、本当の夜空。

溜息を吐きながら、彼女は家路に戻る。

この時、能力を使って帰らなかったのが仇となった。

「……え？」

曲がり角の向こう側で思わず見てしまった光景。  
そして、少女と目が合ってしまった。

高町なのはと、目が合ってしまった。

「はる、かちゃん？」

「」

彼女は金色の毛のフェレットを抱きかかえており、その視線の先には黒い『何か』が存在していた。

最悪だ、と思わず呟いてしまったが、その声音は『何か』の叫び声によってかき消されてしまった。

そして『何か』は飛び跳ね、なのはを踏み潰そうとする。

「ちっ………！」

しかし遥がすぐさま彼女の体を抱きかかえ、すぐに腑罪証明を行い少し離れた場所に移動した。

その現象になのはとフェレットは驚いていたが、遥はなのはを降ろし、

「驚いていないで。今はこの状況をどうするかだけ考えて」

と言うと、思い出したかのように『何か』を一人と一匹は見た。そして、フェレットが遥を見つめ質問してきた。

「貴方は魔導師ですか？」

「……一応ね」

「でしたら、これを使ってアレを封印してください」

フェレットはどこから取り出したのか、赤い宝石を見せてきた。それをほんの少し見つめた後、

「無理ね」

あっさりと否定した。

「え……」

「私は半人前どころか三流よりもっとしたのレベルよ。それも戦闘向きじゃないし、才能も無いわ」

「で、でも……」

「むしろ、彼女の方が適材じゃないのかしら？」

遥がなのはを見ると、それを応用にフェレットもなのはを見た。いきなり自分が上げられた事に少し驚いた。

「え……私!？」

「そうよ。見たところ、私以上の魔力量あるし」

「ど、どのくらい……?」

「私が十円だしたら、貴方は五百五十円ほどの価値はあるわ」

「ど、どのくらいかわかり辛いかも……」

「あ、あの……その方は魔法とは……」

「関係ないわね」

『ユーノ様』

と、そこで赤い宝石が反応した。

「わ、しゃべった」

『その遥様よりも、彼女の方が適合率が高いと思われます』

「れ、レイジングハートまで……」

フェレット……もとい、ユーノは赤い宝石デバイスの発言に表情を陰しくしながらもどうするか考えていた瞬間

「なのは、平気か！」

上空から大量の魔力弾が降ってきて、『何か』に攻撃していく。  
銀色の光を放つ、火の弾や風の弾、水の弾や氷の弾に雷の弾である。  
そして現れたのは 中島貴樹である。

「貴樹君！？」

「えっと……彼は誰でしょうか？」

「クラスメイトよ。もつとも、彼も高ランク魔力量の魔導師だけど」

その言葉に驚くユーノ。

この世界は魔法技術が無い世界のはずだ、と考えるが今はそれよりも、

「なのは！ 悪いが俺は封印魔法を持っていないんだ。だからお前がアイツを封印してくれないか！？」

「わ、私が……？」

「ああ！」

勝手に進んでいくが、遥は気にしない。

後はテンプレ通りに終わるであろうと思ったからだ。

その後、なのはは貴樹に頼られたためか、嬉しそうにレイジングハートを起動させ、そして『何か』を封印した。

そのすさまじさにユーノは呆然としていたが、遥自身は今後何を話せば良いのか、内容を考え始めていた。

中島貴樹が介入する事を前提として、自分がどうすれば原作にこれ以上介入関わらないように出来るか、頭の中で構築し始める。





## 八話 彼女の原作介入（後書き）

今回は雑でした。あと、gggg。

実はと言つと、今日は投稿するつもりがありませんでしたが……—  
応思い浮かんだので投稿。結果、雑になってしまいました。

すみません。

P・S

作者はポニーテイル萌えです。

異論は認める。

九話 以上ノ異常、終了。以下ノ異化、始めよう。

中島貴樹 彼は転生者である。

魔力値SSSランクで、エレメンタルハンド レアスキル五属制御の稀少技能を持つ魔導師。

しかも『ニコポ』と『撫でポ』も貰い、転生してきた転生者である。

そんな彼は原作が開始するまで我流で魔法の腕を鍛えていた。

そしてそらなりに強い魔導師となった頃に原作が始まり、高町なのはの元に向かった。

そこで黒い『何か』を魔力攻撃を行い、なのはを魔導師として覚醒させ、封印させた。

そこで、気づいた。

浮鳴遥……クラスメイトで、月村すずかの隣席の少女。

クラスで唯一、彼に好意を抱いていない少女である。

そんな彼女がユーノ近くに存在していたのだ。

「アイツも転生者だったのか……」

面倒臭そうな表情をしている遥を見ながら呟いた。

公園。

あの場に居たらまずい、と言うことで移動したのだ。

そこには当然、遙も居た。

そして魔法やジュエルシードのことを聞き、なのはと貴樹は参加する胸をユーノに伝えた。

しかし、遙は

「私はパス」

参加しようとしなかった。

「え……でも、ジュエルシードってものは危ないんでしょ？ だったら、回収しなくちゃいけないんじゃない？」

「そうね。だけど、さっきも言ったとおり私には魔導師としての才能は無いし、足手纏いになるだけじゃない。落ちこぼれも良いところだわ」

自虐的な言い方ではなく、ただ事務的な言い方をしていた。

「それに、適材適所って言う言葉があるでしょ？ 全然適材じゃないわ」

「……………」

その間、貴樹はずっと考えていた。

この女、何が目的だ？ と。

しかし、遙の目的はあっさりとしていたものだった。

「簡単に言っちゃうと、私は関わりたくないの。そう言うのは……時空管理局だっけ？ その組織にさっさと連絡して回収してもらわなきゃ。そう言う危ない事、専門家に任せるべきでしょ」

右手の甲を見せるかのように上げた瞬間、爪が一気に伸びた。

「え……」

「とりあえず、その傷は治しておくわ」

ファイブフォーカス  
五本の病爪によってユーノの怪我を治す。

その能力に驚いている三人に遥は背を向け、

「私の介入劇は、ここで終わりよ。以上ノ異常、終了」

去っていった。

ちゃんと買い物袋を持って。

「甘く見ていたわ……」

帰路に戻りながら、遥は呻いた。

「原作介入をちょっとでもしちゃうなんて……」

自分の行動を反省しながら空を見つめた。

思えば、このお遣いを頼まれた時点で間違っていた。

頼まれた時、必死に拒否すれば自分は介入しなかったのでは？ と考える。

そうすれば、ジュエルシードを拾わずウサギの使い魔とも出会わなかったのでは……。

「……あ。彼等につさぎの事ぐらい言っておけば良かったかも」

ま、別に良いか。

そう結論に達し、遥は家に戻った。

その後、かなり叱られたが。

翌日。

遥は親に長い時間説教を受け、少し寝不足気味であった。

浮鳴家の家は学校に近いので歩きで登校しているため、原作主人公達が乗車しているバスには乗っていない。そのため鉢合わせる事はないが、今日と言う今日は面倒臭く感じた。

遥が欠伸をしていたところ、背後から……

「おはよう。浮鳴先輩」

「……ああ、キール。おはよう」

キールが挨拶してきた。

長い銀髪の少女はニヒルな笑みを浮かべながら、接してきた。

「まったく……先輩が原作に関わらない詐欺を行うとは思わなかったよ。なんだい、バニングス先輩に習ってツンデレでも始めたのかい？」

「うるさいわね。私だって、関わりたくなかったわよ」

某金髪の少女がバスの中で誰がツンデレよ！……と叫んでいたらしいが、遥は知らない。

「クツクツク……いや、失礼。確かに浮鳴先輩からは原作に関わりたくない意志はしつかりと感じられる。だが、少し油断しすぎなのでは？」

「……まあ、私もそれくらいはわかっているわ」

自分でも失敗した、と自覚していた。

改めて他人から言われるとさらに自覚させられる。

「……と言うより、何で貴方は知っているのよ」

「僕は感知系能力者なんだよ。行方先輩も知っていると思うよ？」

先輩が介入してしまった事を監視魔法<sup>サーチャー</sup>辺りで」

「……………」

そもそも、遥の実力は行方の能力で知られてしまっているが、遥はと言うと二人の実力を知らないわけだ。正直、キールの方はと言うとまったく未知数なのだ。

恐ろしい事に。

「一つだけ、質問させてもらう」

「何かしら」

「何で原作に対する防衛なんて練っているの？」

一瞬、何を言われたのか理解出来なかった。

「現実的な暴力沙汰から逃亡するための防衛能力は理解できるけど、原作を介入しないための力とか……意味が分からないな」

「……………」

「よく言うだろ？ 幽霊は怖がっている子の元へ現れるって。つま

りアレだよ。君は原作を意識しすぎたから原作介入しちゃったんだよ。数々の二次創作でも原作に介入しないと言った転生者達も、最後の最後にはちゃっかり介入していたりするだろ。結局は、心のどこかで原作を意識しているから介入しちゃうんだよ。その意識を、無くさない限り、君はまた介入しちゃうよ」

「……………」

確かに、その通りかもしれない。

介入したくないとかほざいてたくせに、かなり原作の事を考えていた。

好きの反対は嫌いではない。無関心だ。

「……そうね。少し考えを改めてみようかしら」

「うん。それが良いと思うよ」

肉体年齢では一歳年下のキールであるが、かなり大人っぽい。

確かに転生者の中身の年齢は見た目とは一致しないものだが、それでも年上と言う感じをさせる。

「……ねえ、キール。貴方の前世って」

「ストップです。浮鳴先輩」

前世のことを聞こうとした瞬間、遮られた。

禁忌だったか？<sup>タブー</sup> と思いキールを見てみるが……キールは遥ではなく、前を見ている。

彼女達はすでに学校の門を過ぎている。

つまり、彼女達の前にあるのは校舎だけなのだ。

だが、キールは校舎より少し前の位置の場所を見ていた。



そこには一人の少年が立っていた。

遥と同年齢であることが伺える背丈。

顔は平凡そうな、どこにでも居そうな顔だ。

黒髪黒目。服装は普通の服屋で買えそうな服を着ていた。

それでも遥の目には、普通と言う印象が浮かばなかった。

「初めまして、ボクと同じ転生者のお二人さん」

彼は挨拶をしてきた。

それと同時に封時結界を張った。

自身の力で張るタイプではなく、既に用意しておいた物を発動する  
借り物タイプの結界だった。

「転生者ってことは、それなりに強いんだろ？」

戦闘狂……否。

「つまり、殺しがいがあるってことだ」

戦闘凶。

ナイフを逆手で持ち、上に掲げ宣言した。

まるで主演として開始の合図をするかのように、言った。

「これより、ゼロ零崎狂識きやうしきによる零崎を 以下ノ異化、始めよう」

殺人宣言を。



九話 以上／異常、終了。 以下／異化、始めよう。 （後書き）

超展開。

原作に関わらないと誓った瞬間、殺しの宣言が来ました。おいおい……。

本当はユーノ君達との会話を多くするつもりでした。

使用した能力の説明だとか……しかし書き下ろすのが書いている途中で難しく感じたので、断念し投稿。

遥の以上／異常、終了。

これは魔法との関わりを異常で終えると言う意味と、魔法と言う異常への介入を終える、と言っ宣言。

狂識の宣言は逆になります。

以下はこれから先。異化は非道的な世界に成る。

そう言っ意味ですね。

次回は戦闘になるかもしれません。

それでは、この辺で。

## 九・五話 彼女はウサギで使い魔（前書き）

無印辺りでは原作をマジで回避する物語だからリリカル成分がかなり足りない……。なので、今回は他のキャラで話を書きました！  
時間軸で言えば、遙達が戦闘した日の放課後です。

次回は遙の話です。

## 九・五話 彼女はウサギで使い魔

ウサギの耳を生やしている少女、鈴仙・優曇華院・イナバ。

利き腕である右手の中指には紫色の宝石が嵌っている指輪と、人差し指には藍色の宝石が嵌っている指輪を嵌めている。

彼女の身長は小学三年生ぐらいであり、それは主の消費する魔力を節約するために小さい姿をしている。主が同じくらいの背をしているから、とも言えるが。

「……駄目ね。この辺りにはジュエルシードが無いわ」

主と違い、魔法が優れている鈴仙は魔法的手段でジュエルシードを探知してみたが見つけれなかった。彼女の『瞳』を使えば見つけれなくも無いが、主と違って『瞳』を使えば大量に魔力を消費する事になる。故に一般的な魔導師と同じ方法で探査している。

「今現在、ジュエルシードは一個。あの転生者から奪った物だけとは……」

原作を知っていればあっさりとジュエルシードを手に入れられるだろうが、生憎主は原作を知らない。

否、【魔法少女リリカルなのは】などと言う創作物が無い世界から転生してきたのだ。

知る事などできない。

「ん。魔力反応」

突如神社周辺に出現した魔力に少々驚きながらも、彼女は呟き確認する。

幻術魔法により姿を隠しながら、ジュエルシードの魔力反応がした元へ飛んでいく。

鈴仙が向かった先の神社には大きな犬がいた。

さしずめ、ジュエルシードと融合したのであると推測した。  
封時結界を展開し、手を銃の形にする。

「バンッ」

中指に嵌っている指輪が紫色の光を放ちながら、指先から銃弾型の魔力弾を一発放つ。

すると魔力弾が途中で増殖し、一から百に増えた。  
その光景に驚いて動けないでいる犬に全て当たり、あっさりと戦闘不能になった。

（女だけど）ガンマンみたいに（指先だけど）銃口に息を吹いてから近づき、ジュエルシードを封印した。

「それじゃ、次に行く」

「あ、あの！」

次のジュエルシードを探しに行く準備をしていると、声を掛けられた。

未だに結界を展開しているため、許可した者以外は入れないはず。

侵入者<sup>れいがい</sup>を覗いて。

振り向く。

そこには彼女の主と同じ学校の制服を着た少年と少女、そして使い

魔であろうフェレットが居た。

このメンバーぐらいは知っている。原作の主人公達だ。

「あっちゃー。少し遅かったか……」

転移使つてでも早く来るべきだった、と反省していたら、気づいた。男の子の方が鈴仙の姿を視界に捉え、驚いている。

「な、何でお前が……」

「それは当然、私もジュエルシードを狙っているからよ」

「そうじゃない！ 何で優曇華がここ居る」

居るんだよ。

そう言おうとした瞬間 殺気が鈴仙から溢れ出た。

思わず口を閉ざしてしまふほどの。

「何で私の名前を知っているかとか聞きたいのは山々だけど……でも、これだけは言わせてもらっわ。私の事を師匠以外が優曇華と呼ぶ事を、私は非常に嫌っているわ。だから、鈴仙って呼びなさい。鈴仙・優曇華院・イナバ……の、鈴仙」

何故彼が彼女の名前を知っているか心当たりがあったが、敢えて言わず、主張するかのように……そしてなのはとユーノに自己紹介するように、言った。

「師匠……そいつの名前は八意永琳やいころえいりんって名前か？」

「……………誰？」

初めて聞く名前に、鈴仙は首を傾げた。

「違うのか？」

「違うわ。私の師匠兼主人は……そうね。『<sup>いぬ</sup>狗』とでも称させてもらうわ」

狗？

幻想卿関連で狗……犬と言えば、と考えている間、

「ねえ、ユーノ君。あの娘の頭からウサギさんの耳が生えているんだけど……ユーノ君みたいにしゃべられるみたいだけど」

「……あのね、なのは。僕は一応人間なんだよ？ 今は変身魔法でこの姿になっているけど」

「ええっ！？ そうなの！？」

「そっだよ。……あの使い魔のことだよな？」

「使い魔……？」

「そっだよ。動物を依り代とした魔法生命体のことだよ。主と契約をして、そして主から魔力を常に供給してもらう事によって魔法を発動できるようになったりするんだ」

「へえ……」

「高性能の使い魔を生み出す場合、その消費魔力の量は凄まじい。だけどその分、一般の魔導師よりも上をいく使い魔も居たりするんだ」

「じゃあユーノ君。あの鈴仙ちゃんって、どのくらいすごいのか？」

鈴仙の方をまつすぐなのは見て、ユーノに聞いた。

ユーノもつられるように鈴仙を見て、

「多分……Sぐらいだと思う」

重い調子で言った。



「なっ！？ Sランクだと！？」

「えっと……ユーノ君。昨日、遙ちゃんもBだとかAAAとか言っていたけど……どう言う意味なの？」

「ランク、と言うのは魔導師ランクのこと。つまり魔導師の実力レベルさ」

ユーノは鈴仙がこの時間、襲ってこない事を疑問に思いながらも話を続ける。

「昨日の彼女が言ったのは魔力量のこと。つまり魔導師ランクとはまた違う物だけど……彼女が言ったとおり、なのははAAAランク。つまり彼女は なのはの三段階ほど上の実力持ちってことだよ」  
「……………」

ユーノが、なのはが五百五十円ぐらいだとすると、彼女は千円ぐらいだね、と苦笑いしながら言う。

しかし、その圧倒的実力差になのはは絶句してしまう。

思わず驚きながらも、なのはは隣の貴樹を見る。

強い彼なら そう思いながら見たが、彼は首を横に振った。

「……………」

“この” 中島貴樹はそれなりに頭が良い。

そしてユーノが言った通り相手がSランクならば……勝てるはずがない、と考えた。

魔力値がSSSランクと云えど、それが<sup>イコール</sup>で実力になることではないことぐらい知っている。

そして何より

「何で霧と雲のマーレリング指に嵌めているんだよ……………」

彼女の右手に嵌っているリングを見つめ、溜息を吐いた。  
『幻想卿』 + 『REBORN!』 が合わさっているのだ。能力が未知数なんてもんじゃない。

「私の実力を考察しているところ悪いけど、私はそろそろ帰らせてもらうわ」

「え？」

「確かに貴方達もジュエルシードを狙っているようだし、持っているみたいけど……そこな魔導師三人と戦ってまで奪うつもりは無いわ」

さすがに面倒だしね、と呟き 転移魔法を展開した。

「なっ、移動魔法！？ 彼女は逃げるつもりだ！」

「逃げるとか言わないでよ。お互い、やることは戦闘じゃなくてジュエルシードの回収なんだし」

「で、でも！ それはユーノ君の何だよ！」  
「……………」

なのはが会話に介入してきたので、そちらを見た。

赤い瞳がなのはの姿を捉えた。

真剣な表情をして 瞳に、黒色の勾玉模様を浮かばせて。

「え………何？」

「うっん。別に。ただごめんなさいけど、私の師匠も必要としている物だから 譲れないのよ」

そう言って、転移魔法を発動した。

鈴仙が居なくなっただ事により、自動的に結界は消えた。



## 九・五話 彼女はウサギで使い魔（後書き）

まあわかるでしょうけど、この作品に出てきている鈴仙は【東方】に出ている本物の鈴仙とは違います。幻術とか使いますけど。単なる魔改造されたウサギの使い魔です。姿形口調声が似ているだけの。

## 十話 彼は凶器／狂気（前書き）

### 【零崎】

人を快樂だとか悦樂だとか、そう言った理由で殺すわけではない殺人鬼。

ただ殺したいから殺す、殺人鬼。そこに理由は無く、無意味にただ殺す存在。

作品：戯言シリーズ・零崎シリーズ、に登場

## 十話 彼は凶器／狂気

零崎狂識      名前からして、殺人鬼であろう少年。

「零崎……ねえ」

「……なるほど。彼は僕達と同じ“前世持ち”か」

「……？ 前世の記憶なら転生者は全員持つているはずでしょ？」

転生者……簡単に言うと死んで転生した者。

多く存在する二次創作では、必ずと言って良いほど神がその転生に絡む。

そして神が関わらずとも、転生者は前世の記憶を保持しながら次の人生が始まる、と言う物語が多い。

遥もその類である。

「ん……ちょっと違うんだよ。普通の転生者と“前世持ち”の転生者は」

「……後で教えなさいよ」

「了解」

いつもより真剣な表情をしながら、しかしそれでも笑みを消さないキールを見据えて、目の前の少年を見る。

手には数字が刻まれた、よく切れそうなナイフが一本。それしかないのに、圧倒的凶悪さがこの場を支配している。

「え、嘘……」

「どうしたんだい？ 浮鳴先輩」

「あのナイフ……ECディバイダー？」

数字が刻まれている武器　【「魔法少女リリカルなのは《このせかい》」ではECディバイダーと言う物が大体は当てはまる。

この時代ではまだ出てきていない武器であるが、神からもらったのであれば、納得が出来る。

「あ、もう見抜いちゃった？　ご名答！　僕が神様に頼んだ改造ECウイルスによって強化された肉体と武装なんだぜ！」

傲慢と言うよりも、世間話するような口調で言ってきた。つまり調子に乗った転生者ではないと言うことだ。

「……どうしよつか。魔法が効かないだろうし……逃げる？」  
「無理だね」

あっさりとキールは言ったが、遙自身もそれに関しては頭に浮かんでいた。

「まあ、そうよね。アイツが零崎（れいじ）を名乗るってことは、最終的に人を殺せば良いんだし」

校舎を見つめながら、遙は呟く。

ここで二人して逃げれば遙とキールは無事であろう。だが、学校にいる生徒や教師の命は保障しかねない。こんな殺人鬼を誰が保障してくれるもんか。

（何か方法ある？）

相手に作戦を聞かれない様に念話に切り替えた。

（簡単な話さ。僕達とは戦ってはいけない、と戦意喪失させてどこへ撤退させてしまえば良いのさ）

（……どうやって？）

（君には『ファイブフォークス五本の病爪』があるじゃないか）

あらゆる病気を操るスキル ファイブフォークス 五本の病爪。

（……でも、これは病気を操るんであって、ウイルスを操るものじゃないわよ？）

（そうだね。でも、ウイルスを死滅させる病気も作れるんじゃないかな？）

「……………」

その発想は無かった、と思っただが、

（私、あのウイルスの成分知らないわよ？）

（僕が知っている。このデバイスに載っているから、それを見ながら調整してみて）

（時間が少し掛かるけど……）

腕輪を外してこちらに渡してくる。

渡してもらって、デバイスだと気がついた。

「僕のデバイスの“テール”さ」

「テール……？ これ、インテリジェント？」

「元、ね……」

笑いながらも、少し悲壮感を含ませた笑みを浮べた。  
そのことに首を傾げながらもデータ採取を始める。



「さて、殺人鬼君。僕が相手になろう」  
「へえ。それじゃ、相手になってもらおうか」

「さて、どうしようか……」

キールは冷静にECウィルスの事を考え始める。  
未来の技術では感染者との対戦方法が編み出されているが、この時代にはまだ存在していない。  
つまり対策が無い　普通ならば。

「まあ、転生者<sup>はくたち</sup>には関係ないけどね」

ポケットから小銭を取り出す。

狂識がナイフを刺すつもりで突っ込んでくるが

「戦闘能力があるとしても、戦闘技術はまだまだだよ」

電撃を浴びせた銀貨を相手に向かって撃つ。

それは科学的計算方法により　超電磁砲<sup>レールガン</sup>となる。

「……っ！」

いち早く攻撃に気づいた狂識は右に避けたが、左腕が吹っ飛ばされた。

それを見届けた後、すぐに距離を置き、腕を再生させる。

「すでに病化しているのか……」

「……ふむ。君の能力は御坂美琴みさかみことの能力かな？」

どちらとも相手の能力を分析し始める。

情報とは、相手を打ち負かす弱点にもなるからである。

「なるほど。確かに超能力ならECウィルスの対魔なんて関係ないしね」

「お生憎だけど、これは超能力じゃないよ」

肩をすくめながらキールは言う。

そして“くい”と指を動かした瞬間 狂識の四肢が全て落ちた。

「……へ？」

「さあ、どうする殺人鬼。凶器は地面に落ちたがどうやって人を殺すんだい？ もしかして、刃はに掛けて歯はで僕を殺そうとするつもりかい？」

キールの言葉を聞きながらも、周りをしっかりと狂識は見た。  
そして細い光を見つけ、

「……まさかこの世界に曲絃師が居るとは思わなかったよ」

「単なる系使いだよ」

驚嘆した。

彼は前世の世界に存在した《病蜘蛛シグザク》の技術ほどでもないが、かなりの系使いの技術をこの魔法の世界で見ることになるとは思わなかったらしい。

「まあ、それでも元時空管理局元帥だ。それなりには強いよ」

シニカルな笑みを浮かべながら、キールは言った。

## 十話 彼は凶器／狂気（後書き）

エクリプス

### 【ECウイルス】

人工的に生み出されたウイルス。感染者には強力な破壊衝動と殺人衝動が襲い掛かる。その代わり、身体を兵器化とする。

ウイルスの侵蝕が進めば進むほど、超人的な能力を得ていく。

例：肉体再生・肉体硬化・肉体弾力化など

### 【ECデバイダー】

感染者専用の武装。

これを発動した瞬間から肉体再生以上の能力が発揮され、さらには完全に魔法が効かなくなる。物によって違ひ、デバイスのように変形も出来るようだ。

しかしデバイスと違い、明らかに質量兵器に分類される。

質問ですが、『週間ユニークアクセスが多い順』っていつを基準に変更されるのでしょうか？

## 十一話 彼の予約と条約

「……………」

遙はキールの戦いを見て、聞いて、驚愕する。

レールガン超電磁砲撃った癖に、御坂美琴の能力じゃないと言うのにも驚いた。しかし、元時空管理局元帥と言った言葉の方が驚いた。

“前世持ち”

これがキーワードになるのだと、遙は考えていた。

普通の転生者とは違う転生者……キール。

「て言うより、普通に勝てるんじゃないしら……？」

すでに相手は戦闘不能と言って良いほどの状態である。

異常なまでの戦闘の能力・思考・方法を誇るキールの前に、魔導殺しを備えた殺人鬼であろうと倒れてしまう。

「……………」

もう少し、深く考えたほうが良さそうだと思い直す。

彼方行方に、キール・ローレライ。

さらに目の前の殺人鬼の名字を名乗る少年。

この世界は、単なる転生者が複数居る世界ではないらしい。

『ソリッドポイント  
立体視点』

一定範囲内なら三次元的に細<sup>すべて</sup>かい場所まで見ることが出来る能力。  
距離はと言うと、ミッドチルダの都市クラナガン全域を見渡せるほど。

「……あちゃー。行方先輩、やつぱ居ないや」

いつもなら既に現れているはずの彼方行方が、まだ登場していないのに疑問を抱いたのだが……海鳴市全域を見たが、彼は存在していなかった。

確かに、やり方次第ではキールでも目の前に居る殺人鬼をどうにかすることが可能だ。

ただし、殺す事を前提とした手段だが。

「どうしようかねえ」

だが、彼には予約が居るのだ。

行方やキール以外ならともかく、行方やキールが殺人鬼を殺してはいけない。

そう言う、予約であり条約なのだ。

それと

「……………」

超面倒臭<sup>こちら</sup>そうな気配が、学校に近づいてきているのだ。

ソリッドポイント

立体視点で原因を見つけたが、背筋が凍るような思いをした。

さっさとこの戦闘を終え、教室に逃げ出したいほどの存在である。

「さあ、殺人貴君。どうするんだい？」

出来ればさっさと逃げ出して欲しいんだけど、と言う本心を隠しながら聞く。

狂識は四肢を再生させながら、考える。

「……そうだね。もうちょっと居させてもらおうよ」

ナイフを拾い自分に突き刺す。

リアクトだ、と遥は気づいたが、

「……あれ？」

「残念ながら、リアクトは出来ないよう小細工をすでにさせてもらっているよ」

リアクトが発動せず、ECウイルスの真価が発揮できない。  
何故か。

「……うーん。ちょっと、面白くない展開だな」

「そうかい？　なら、さっさとどこかに行つてほしいんだけど。…」

…そろそろ浮鳴先輩も、君のECウイルスを死滅させる病気を製作し終えた頃だろうし」

「ちょ」

いきなり自身の名前を出されて間抜けな声を遥は出してしまった。  
しかも酷いネタバレだ。作戦内容を敵に言ってしまったのである。

（今回の目標は、目の前の零崎狂識をここから居なくさせることだ。つまり、戦意喪失してどこかに行ってもらえば良いんだよ）  
（……じゃ、つまり、私の事を言っ、これ以上戦うのは危険だと知らせたわけかしら）  
（そう言うことだよ）

念話で次の作戦内容を伝えた後、キールは狂識を見据える。

「さあ、どうするんだい？」

「……なるほど。確かに彼女は脅威的な存在らしい。どう言った能力かは知らないけど　つまり、殺せば良いんだよね？」

最悪な展開になった。

むしろこれから狙われる原因を作ってしまった。暗殺されるかもしれないのだ。

「ど、どうするのよキール！」

「……しょうがない。少し本気を出して彼を止めるしか」



劣等感

「  
は？」

いつの間にか、狂識の体中には大量の『鍵』が刺さっていた。  
一般的な銀色の鍵に、自動車の鍵に、門かどに使われるような鍵に、バ  
チカン市国の国章に使われている『天国の鍵』と呼ばれている物と  
同じ形の鍵。

ありとあらゆる鍵が、狂識の体に刺さっていた。

「ぐっ、がはっ」

喉にまで刺さっていたため、引き抜いた際に口から血を吐いてしまった。

そして喉が再生したのを確認してから、校長の銅像の上に座っている少年を睨む。

そこには聖祥小学校の服を着ている、白髪しろかみに黒目の少年が居た。

顔立ちは整っている方であるが、何故かずっとは見ていられないほどの、『何か』を彼からは感じる。

手元には鍵が存在しており、それを見せびらかすように空中に上げて掴む、と言う動作を繰り返していた。

彼は笑みを浮かべながら、

「やめて欲しいんだけど」

と、言った。

「……何が？」

「いやいや、俺がこれから通う学校の人間達を、アンタは殺そうとしていただろ？ そのくらいの殺意をアンタから感じるぜ」

「……………」

二人の少年が話している間、一方キールは驚いていた。

銅像に座っていた少年の気配を察知できなかったし、今でも感じられない。

それどころか、先程までは姿を立体視点ソリッドポイントで捉えていたのだが、数分前に急に消えて、この場に現れたのだ。

だから、キールは黙って二人の会話を見届ける事にした。

少しでも、情報を得るために。

「まったく……廃校にする存在は代表的には俺達だろ。他の、しかもこの学校の人間じゃない奴に、廃校にされたくないね」

「……廃校は前提かい？」

「さあね。俺は気まぐれな性格をしているから、何もしないで卒業するかもしれないし。だから、俺から学校を奪うなよ」

「……………」

狂識は自身の体中に刺さっている鍵を一度見たあと、

「ところで、君は一体なんて名前なんだい？」

と、聞いた。

その言葉に嘲笑するような笑みを浮かべながら、

「普通、自分から名乗るもんだろ」

と言った。

「ま、俺は心が寛大だからな。その人を殺す事しか出来ない鬼と違って、俺は他人にちゃんと自己紹介が出来る人間。わく、すごいすごい、ってね」

「……一タイラつく言葉で言うね」

「さて、それじゃお望みどおり、自己紹介しよう」

狂識の言葉には答えず、先程聞かれた質問を敢えて答え始めた。

「初めまして、これから私立聖祥大学付属小学校に通う　人類最  
マイナス　みなまたはしら  
低で過負荷な男、現実否定主義者の水俣破白だ。よろしく頼むな」

異世界。

どこかの世界に、二人の少年が居た。

「悪いな。付き合わせちまって」

「そう思っただったら、この幻術を解いて欲しいんだが」

片方は、行方。片方は、藍色の髪持つ少年。

「それで、『狗』。お前はどっするんだ？　これから」

「もちろん時空管理局に居る奴らと、零崎狂識に復讐するさ」

瞳には、黒い勾玉模様を浮かばせながら。

『狗』と呼ばれた彼は、そう言った。

「……じゃあ、一つだけ言っておく。海鳴市に、現在殺人鬼が居るぜ」

そして、海鳴市が荒れるような一言を行方は言った。

## 十一話 彼の予約と条約（後書き）

今回、遥は空気でした。

現在の転生者：遥・行方・キール・狂識・破白・中島・？・？  
計、七人  
合

## 十二話 彼女の同盟加入（前書き）

今更だけど、ちゃんとした内容に成ってしまったので、十話ぐらいで終わるかも、何て予定は消えた。

今回は短いです。

## 十二話 彼女の同盟加入

「  
どう言うことかしら  
」  
「  
ん？」

中庭。

そこでお馴染みと化しているメンバーで昼食を取っていた。  
メンバーは行方・キール・遥である。

「  
どう言うことって、何が？」

「今朝の戦闘の時、何で来なかったのかしらと言うことよ」

行方に向かって遥は質問する。

あの過負荷マイナスを名乗る少年が現れた後、殺人鬼せいのきの少年はどこかへ行ってしまったのだ。殺人鬼にも、戦って良い相手かどうか判断できる。そして破白は戦って良い相手では無い、と結論に達し逃走したのだ。そしてその後、破白が教師の元へ行ったところで、やっと緊張の糸ほくが解れたのだ。

「  
……別にオレはヒロインがピンチに陥ったら現れる主人公じゃないんだぞ？」

「わかってるわよ。そんなご都合主義が無い事を」

「まあ、確かにアレは僕も流石にヤバイと思ったね。そもそも行方先輩はどこに居たんだい？」

「異世界」

「  
「……………」」

遙はジト目を、キールは苦笑を行方に向けた。  
そして数秒経った後、遙は溜息を吐いた。

「……本当に、この同盟に入って良いのかしら」  
「ん？ 入るのか？」

行方が唐揚げを箸で拾いながら聞いた。

「入るつもりだったんだけど、ね。ほら、昨日原作開始しちゃったじゃない？ 私」

「悪い。異世界に行っていたから知らね」  
「……………」

遙は引き攣らせた笑みを浮べた後、溜息を吐いた。

「まあ、しちゃったのよ、私。だからこの同盟に入れば何とかなるんじゃないかしら、と思ってるね」

「その判断は悪くないね」

遙の言葉を、キールが肯定した。

「正直言つと、僕達の同盟って言つのは口約束じゃないんだよ」  
「……………」

「とりあえず、僕達の同盟に入ってくれない限り言えない事だつてあるし、聞かせられない内容だつてある。これは僕達の意図ではなく、世界からの制限なんだよ」

「……………」

「だが、僕達の同盟に入ればその制限が無くなるんだよ」

「……………」途中で抜けたら？」  
「得た分失う」



キールと遙が会話していたところ、行方がいきなり介入してきた。行方の方を見ると、エビフライを食べていた。

「……………」

「………何だよ」

「いえ、別に」

海産系の甲殻類が好きな遙にとって、目の前で淡々とエビフライを食べる行方の行動は理解しがたかった。しかしその感情をグッと抑え、弁当に入っている昨日の残り物の毛蟹の身を口に含む。ふと、遙が行方の方を見ると鞆から本を取り出していた。

「それは？」

「契約の書」

行方が本を開くと、そこには契約を記すためのページが備えられていた。

ページの中心だけ四角形に空白が出来ており、その周りは意味不明の文字が大量に書かれている。

その空白の場所に契約内容を記すのだと遙は理解した。

「オレが作った契約書が纏まった本だ。異世界の古代語を組み合わせた契約のページだ」  
キアス

「これに私が同盟に加入すると書かない限り、私は加入できないわけね」

「そう言うことだ」

弁当箱を片付けながら、行方は筆箱を取り出しシャーペンを取り出した。

「……シャーペンで良いの？ 血とかで書くのだと思っていたけど」  
「確かに術式は古代語で描かれているが、作られた術式は最新のものだぞ？ そう言った操作は製作者なら簡単に出来るさ」

実際には簡単じゃないんだけど、とキールは呟きながら自身の弁当箱を片付けていた。

「で、どうする？」

「……加入したメリットを覚えてくれないかしら？」  
「これだ」

行方が自分の鞆からまた違う本を取り出した。  
先程よりも表紙が黒い本である。

「それは？」

「オレが製作した、オレの魔導の二分の一が入っている魔導書だ」

「『孤独の書』だね」

「……………」

夜天の書のような表紙であるが、全然違う事を、受け取って理解した。

「基盤は夜天の書だが、夜天の書以上の防衛能力だ。と言うか、攻撃能力の方はそこまで無い」

「……………闇の書とは違うのよね」

「夜天の書の方だから暴走とかは無いぞ」

「でも、私そこまで魔力無いんだけど……」

「『孤独の書』自体に魔力が内包されている。書自体にリンカーコアがあり、その中にある魔力が減少する度に増殖するようになって

いる。だから魔力の心配はしなくて良い、と言うデバイスだ。アルカンシエルを撃たれようと、完全防御してくれるぞ」  
「……………」

遥には苦笑いを浮かべることしか出来ない。

「それをやるよ」

「そう。ありがたいわね」

シャーペンを受け取り、遥は『契約の書』のページに自身の名前を書き始めた。

「同盟の名称はあるのかしら？」

「SOS団」

「またふざけたものを……………」

“浮鳴遥はSOS団に入る事を誓います”と書き、シャーペンを置いた。

すると文字がページに浸透していき…………

「これでもう消せないぜ」

「…………恐ろしいわね」

消しゴムを取り出し、消そうとしてみるが、無理であった。

「すでに術式の一部と成っているんだ。他の文字が消えないように消す存在の意味を無力化しているんだよ」

「禁書世界の魔導書みたいな状態ね」

遥は行方の事を、ただ魔法が得意だとは思っていなかったが、改

めて実力を教えられた。

文字通り、最高の魔導師なのであろう、と。

「んじゃ、放課後にお前の家に行つて良いか？」

「構わないわ。だけど、家の場所分かるかしら？」

「安心したまえ。僕は感知系だと言つただろ？」

キールの言葉を聞き、何だかストーカーみたいな力ね、と遥は思つてしまった。

「んじゃ、そんな時にこの世界の真実を教えてやるよ」

鞆を持ち、行方は立ち上がった。

「それじゃあ、放課後にね」

キールもそれに習い、教室へと向かった  
そして残つた遥は……

「……そろそろ次の授業ね」

次の授業の仕度をしに、教室へと戻つた。

『孤独の書』を持っていきながら。

## 十二話 彼女の同盟加入（後書き）

次回はこの世界について。

## 急遽書き出した番外編（前書き）

カップルがイチャイチャする日が今日だと思い出し、急遽書き出しました。

時間軸は、中学三年ぐらいです。

## 急遽書き出した番外編

厚着姿の少年、彼方行方は現在『翠屋』の箱を右手に提げながら、雪が積もっている道を歩いている。

箱の中にはケーキが入っており、二人分のケーキが入っている。行方は器用に箱の中の時間をずらして傷まないようにし、自身には温暖化魔法を発動している。

「……うん。思った以上に、遥から貰った手編みマフラーは暖かいな」

数日前にとある少女、浮鳴遥から貰ったことを思い出しながら呟く。首元だけは温暖魔法を使わなくて良いほど暖かい、と行方は感じていた。

雪が降っている。

白く輝く氷の結晶が空から舞っている。

そしてそんな空を見上げながら、彼は呟いた。

「さつさと帰るか」

早足の状態で帰宅した。

「ただいま」

「お帰りなさい」

玄関<sup>そこ</sup>には彼の養父　ではなく、遙<sup>そ</sup>が立っていた。  
行方の養父は出張が多いので、友人が少ない行方は遙を呼んでいたのだ。

遙の方も友達が少ないわけではないが、だからと言ってグループを作るタイプではないため、クリスマスは暇だったので行方の家に来たのであった。

そして、遙の言葉で行方は先程ケーキを買いに行っていたのだ。自腹で。

「しかし……キールの野郎は予定入っていたか」

「……キールは女の子でしょ？　野郎って言うのはおかしくない？」  
「気にするな」

行方は箱の中からケーキを取り出し、さらに盛り付ける。

さらにコップを取り出し、冷蔵庫からジュースを出して二人分注ぐ。

「今食べるの？　普通夜なんじゃないかしら」

「多めに買っておいた。今食べる用と夜食べるようだ」

「貴方は乙女か」

「腹が減っていたんだよ」

自分と遙の前にケーキが乗った皿とジュースが入ったコップを置く。

「てか、お前は食べるの？　食べないんだったらケーキ戻すけど」  
「いただくわ」

女の子は甘いものが好きなのよ？　それって本当なのか？  
そんな話をしながら二人でケーキを食べていく。



「甘いものが好きと言うと、リンディさんだよな」

「私達は直接会ったことないけど……あれ？ 行方は会ったことあるんだっけ？」

「前回の人生でな」

行方は自分のイチゴショートケーキの上に乗っている大きなイチゴを、遥の皿に移してやる。

先程食べたそうな表情を少しだけしていたのを行方は気づいていたからだ。

「……ねえ」

「ん？」

「後でアーチと一緒に見に行かない？」

「別に良いけど」

行方は今夜のメニューを考えていたところを、いきなり言われたので素っ気無く返事してしまった。

しかし遥は彼の性格をそれなりに知っているので、別にそこまで思ったりしなかった。

「偶には二人つきりでさ、ゆっくり歩くのも良いと思わない？」

「ん……そう言えば、転生者とかそっち絡み無しではあんまし話したりしないもんな」

偶には良いかもな、と呟いた後ジュースを飲み干す。

そして遥はチョコケーキを食べている最中、ふと行方が彼女の顔をジッと見ていることに気づいた。

「な、何？」

「クリームが付いているぞ」

行方は彼女の頬についているチョコクリームを指ですくって、それを 遙の口に指ごと突っ込んだ。

「んぐっ」

「……頬を少し紅潮させているが、まさかお前、オレが少女マンガの男の子のように自分の口に含むとでも思ったのか？」

そんなテンプレ存在しねえよ、と言った後に指を濡れ布巾で拭く。

「……女の子の口に指を突っ込む、ってどう言う神経しているのかしら」

「すみませんねえ。こちら、異性感情とか前回の世界で消えているもんで」

「でも、今回の世界では存在しているんでしょう？」

唇を少し尖らせながら、上目遣いで遙は行方に言った。

「まあ、あるけど……そんなに無いぞ？」

「どのくらい？」

「幼稚園生徒同じレベル」

「低<sup>ひ</sup>つく！？」

予想外の行方の返答に。思わず驚いてしまった遙。

「正直、何で自慰とかするのかわからないんだよね。する方法も知らないし、する必要を感じないし」

「よく性欲を発散するためだとか、快楽を得るためだとか言っけど……」

頬を紅潮させながら遙は言う。

単に恥ずかしいだけなのだが、対する行方は首を傾げながら、

「そもそも、その快樂って言うのがわからないんだよ」

と発言する。

「……まあ、貴方らしいわね」

「そうか？」

「そ、そうよ。……その分だと、結婚相手とか出来そうにないわね」

「恋愛とかしないしな。たまに告白とかされるけど、どうも冷めた  
感じで受け取っちゃうんだよな」

「……初耳なんだけど。その告白、どうしたの？」

「普通に断ったけど」

行方は皿やコップを集め、洗い場に置きに行った。

その後ろで、遙は行方の返答に苦笑していた。

行方が作った夕食を食べ終えた後。

「……女の私よりも美味しいなんて」

「言つとくが、前回のオレは独り身で行動していたんだぜ？  
解析で奪った知識を使った料理技術とかもあるし」

構成

「ちよっと頑張ってみようかしら……」

そんなことを言いながら、ふと時計を見た。

「そ、そろそろアーチを見に行かない？」

「……ん？ そうだな。ちょうど良い時間だろ」

行方も時計を見て、仕度を始める。

遙の方もハンガーに掛けておいた上着を着始める。

ふと、行方が首に自作のマフラーを巻いているのを見て、少しニヤニヤしてしまった。

「……その変な笑みは何だ」

「え？ 変な笑み？」

「鏡見て来い」

行方の言葉には従わず、一度後ろを向いた。  
そして落ち着いた頃にまた行方の方を見る。

「さ、行きましょ」

「……腕に、腕を巻きつかせるとか凄く歩きづらいんだが」  
「巻きつかせるとか……もっと良い言い方あるでしょ？」

遙は少し頬を紅潮させながら、遙はそう言った。

「は、早く行きましょ」

「たつく……わかったよ」

行方も笑みを浮かべながら、そう言った。

「と、言う夢を見たんだが」

「黙れ！」

いつもの中庭で、キールの夢落ち発言に対して遙と行方は叫んだ。

## 急遽書き出した番外編（後書き）

行方の

「正直、何で自慰とかするのかわからないんだよね。する方法も知らないし、する必要を感じないし」

発言ですが、これは作者の本音を文にしたものです。

二十四日以内に書こうと二十三時から書き始めたのに……数分間に合わなかった

orz

### 十三話 彼等の“前世”（前書き）

今回の最初の方の関しましては、作者も最近になって気づいた事です。

主に番外編書いている途中で気づきましたが。

今回は説明の話なので、少しgodgod感があります。

### 十三話 彼等の“前世”

場所は浮鳴家。

遙は自身の部屋にキールと行方を招き、ジュースやらお菓子の袋など、下の階から持ってきてきながら、

「座って」

と言った。

行方の方はと言うと女の子の部屋は初めてなのか、興味深そうに部屋を見渡していた。

キールはと言うと、本棚に入っている書物のタイトルを見つめていた。

部屋の中央に置かれている大きいとは言えない白い円まるテーブルの周りに三人は座った。

ふと、行方は自分の事を遙が見つめている事に気づいた。少し待ってみるが、何も言っていない。

「……………」

「……何だ？」

「いえ、女の子の部屋は初めて？……って聞くつもりだったけど」  
「だけど？」

「今更だけど、私や貴方って上だろうが下だろうが名前呼び合わないなあ、って気づいて」

「……ふむ」

腕を組んで行方は思い出そうとする。



「確かに、オレは“お前”としか言わないな。……どうする？　ハルハルとでも呼ぼうか？」

「普通に遥で良いわ。私も行方と呼ぶから」

「それじゃ、僕もそろそろ遥先輩と呼ばせてもらおう」

「構わないわよ。……それにしても、行方って顔に似合わずニックネームとか付けるのね」

基本、行方の表情をはずらず無表情である。

例え笑ったとしても、ほんの少し変わる程度である。

「まあ、感情表現出来なくなったのは転生してからだしな」

「そうなの？」

「まあな。色々合ったし……」

懐かしむように呟く行方に、遥は少し違和感を感じた。

まだ転生してきて九年しか経っていないのだ。

なのに、懐かしむ……？

「にしても、これが女子の部屋か……」

「行方先輩は“前回”も含めて入った事なかったのかい？」

「無いね。“前回”はあの三人のためだけに動いていたからな。恋愛どころか異性との交友すら考えていなかったし」

「彼女達も異性なんだがね……」

「オレ、異性だとかそこまで関心ないし」

遥が知らないところで、色々合ったらしい会話が始まっていた。行方の話は介入できないので、とりあえず……

「キールの部屋は入って事ないのかしら？」

部屋のことを話すことにした。

「キールの部屋か？ こいつの部屋は入った事あるけど、正直乙女チックじゃなかったぞ」

「どんな感じ？」

「『どうぶつ 森』で言うんだったら、モノクロ系の部屋だったな」  
「また懐かしいのを出してきたわね……」

この世界には存在していないゲームを思い出しながら、遥は呟いた。

「ちなみに、行方先輩のは超普通だったよ。最初入らせてもらった時は逆にびっくりしたかな？」

「何で？」

「行方先輩のことだからオカルトグッズだとか部屋に飾ってあると思っただけどね」

クックック、と特徴的な笑い方をキールはした。

「で、結局どんな感じの部屋だったのかしら」

「普通の書物が入った本棚に、勉強机、ベッドだけだったよ」

「普通の書物って……失礼だな」

遥の質問にキールが答えるが、その回答内容に慚然とした声音で行方は呟いた。

そして行方はコップにジュースを注ぎ、一気飲みした後、

「……さて、本題に入ろう」

そう言った。

「まず、この世界はよく二次創作とかであるような転生者複数系のリリカルワールドじゃない」

「ええ。それはわかっているわ」

そもそも貴方達が理解不能な存在だし、とかは言わない。

「この世界で重要な言葉は“前世”だ」

「前世……」

「そうだ。まず、オレとキールに関してだが……一度このリリカルワールドをすでに体験しているんだよ」

「は？」

行方の言葉が理解出来なかったので、間抜けな声を出してしまった。

「簡単に言つとね、遙先輩。僕達は一度死んでリリカルの世界で二度目の人生を送ったんだよ。その上でまた転生して、同じ物語の世界に転生してきてしまったんだよ」

「ちょ、ちよつと待って！」

思わぬ発言に遙がストップを願った。

「そ、それじゃあ貴方達は三度目の人生って事！？」

「そう言うことになるね」

「今のところリリカルワールドはオレとキールだけだが」

「リリカルワールド、は？」

遙は、行方の言葉に疑問を覚えた

「その話はまた後だ。……オレとキールだが同じ世界に住んでいたんだが……他にもオレ達が知っている顔の転生者とか存在する」

「中島貴樹 彼も僕達の世界の住人だよ」

「……え？ でも、彼は単なる転生者にしか見えなかったけど」

「そうだ。つまり、前回の世界の記憶を引き継いでいる奴も居れば、引き継いでいない奴らも居るってことだ。オレはそう言った奴を、中島合わせて二人存在している事を確認している」

片方は転生者じゃなくて、転生者の養子だけだな、と呟く。

「僕達はこの現象を『リセット』と呼んでいる」

「『リセット』……」

「そうだ。だが、全てが再生されたわけじゃない事もオレ達は確認している」

「……？」

「例えば、オレ。前回の世界では呪いとも呼べる術式に半身が侵蝕され、意識が殆ど無かった」

「はい？ つまり……」

「魔物と化していたんだよ。だが、この世界では生まれ方は同じだったのに、その呪い 名称、孤独は存在していなかった」  
デューナル

「例えば、僕。僕は転生者であり、憑依者であるんだが……今回も同じ存在に憑依したんだよ」

しかしキールはと言うと、苦笑染みた笑みを浮かべながら、

「だけど、今回の世界の彼女 本物のキール・ローレイは茶髪から銀髪に変わっているし、かなり女の子らしい容姿になっていた。

さらに年齢も違った。前回のキールはティアナ君達と同じ年齢だったのに、今回は高町先輩達の一歳だけ年下と言っ年齢だったしね」  
いきなり言われた内容に対し、遙は頭の中でまとめる。

【彼方行方】

前回：変な魔法にとり憑かれていた。

今回：普通に健康的であった。

【キール・ローレライ】

前回：年齢はティアナと同じ年。容姿は茶髪で中性的であった。

今回：年齢はなのと同じ年。容姿は銀髪で女の子らしいものだった。

「……能力とかも引き継いだの？」

「まあな。……言っとくけど、目を開いたら戻っている、って言う状態だったから、お前等と違って神とはオレ達は出会っていないぞ？」

「僕なんて、そう言った上位種とは出会わずに二回も転生したんだぜ」

ちよつと乱暴な口調でキールは言った。

「……じゃあ、キールが今朝発言していた、元時空管理局元帥って言うのは」

「そう。前回の話さ。　僕レアスキルの稀少技能ソリッドポイントの立体視点により、ミッドチルダの都市クラナガンを見ていたからね。犯罪者だろうが何だろうが、すぐに見つかったさ。おかげで殉職する少し前ぐらいに名誉元帥の階級をもらったのさ」

戦闘能力だけが成果に繋がるわけじゃないよ、とキールは呟く。

「……ちなみに行方は？」

「影から世界を救っていた。主に馬鹿な転生者どもから」

「製作エミヤ一万を使った、アンチ管理局の転生者三十人＋次元犯罪者大勢との戦は歴史に残ったよね」

キールの発言に、遥は思わず頭をクラクラとさせてしまった。

エミヤ、ってFateのエミヤシロウ？ それを一万作って、大量のアンチ管理局の者達と戦った？

ふざけている。

「安心しろ。今回の世界ではそんなこと起きないから」

「ま、行方先輩と言う魔物と遥先輩と言う化物、そして僕と<sup>キール</sup>言う偽物が揃って戦いに出れば、彼等を全滅させることが出来るんじゃないかな？」

「失礼ね」

いきなりの化物発言に、思わず無然とした発言をしてしまった。ふと、行方は思い出したかのように呟いた。

「そう言えば、この世界にもあの偽エミヤは居るんだよね……オレが倒していないってことは存在しているんだよね……まだ確認していなかったらからアイツが“引継ぎ系”か“可能性系”か解析していないな」

「ちよつと、フラグ建てないでもらえるかしら」

不吉な発言に遥は険しい表情を浮かべた。

……？

「引継ぎ系？ 可能性系？……なんのことかしら」

「ああ。悪い悪い。説明していなかったな」

「先程も言ったように、僕や行方先輩は前世から地位や名誉とか以外のほとんどを今回の世界に引き継いでいるって言ったよね？」

「……その転生者が、引継ぎ系？」

「そうだ。そして、中島のように前回は魔法に関する特典しかもっていないかったはずなのに、今回は『ニコボ』に『撫でボ』を持っているとか、そう言った前回とは少し違ったりすす奴等を可能性系と呼んでいる」

「……複雑ね」

もつとも、遥からして見ればあの厨二病は初見なのだが。

「そうそう。引継ぎ系と言うのは、僕達以外にも存在するんだよ」

「……貴方達以外にも『リセット』に巻き込まれた転生者が居るの？」

「違う」

キールの発言に対し遥が質問したが、行方が否定した。

「前回のリリカルワールドの『リセット』に巻き込まれ引き継いだのはオレ達だけだ。だが、前世から引き継いでいるのは、オレ達以外にも居るってことだよ」

「……どう言う意味かしら？」

「つまり、だ」

目を細めながら、行方は発言した。

「零崎狂識は【戯言シリーズ】の世界からの転生者であり、水俣破白は【めだかボックス】の世界からの転生者だ。他にも、【NAR

UTO】の世界からの転生者もオレは知っている。……つまり、だ。  
アイツ等は好きなキャラクター達の真似をしているわけじゃなく、  
本物なんだよ」

「……………」

行方の言う事は、こうだ。

遙達の前世の世界では物語であつた世界から転生してきた転生者が  
居ると言う事だ。

「特に、零崎狂識の殺人衝動はECウイルスから来る物じゃなく、  
零崎だから発症するものだ。それと、水俣破白の劣等感マイナスは奴自身が  
本物の過負荷だから湧き出る物。正直、この二人はマジでやばいと  
オレは思っね」

行方の言葉で、遙は沈黙してしまった。

「まあ、簡単に言うとかロス物の世界だってことだよ」  
「そんな簡単な話かしら」

そしてキールの言葉に、頭を抱えた。



### 十三話 彼等の“前世”（後書き）

今回のまとめ。

リリカル：行方やキールのように前作からやってきた転生者達＋。  
戲言零崎：狂識は零崎一賊として生きたが死んだ。だけどこの世界に転生した。

めだか箱：過負荷<sup>マイナス</sup>として生きた破白。しかし『リセット』の影響により死んで、そのまま転生。

鳴門物語：十代目火影の時代からやってきた転生者。名称、現在不明。

破白は『リセット』の影響なので神とかそう言った存在と出会っていません。

さらに『貰っていた可能性』により、中島貴樹は恋愛系洗脳能力を保持。

キールも何だかんだ言って、容姿と年齢が違ふ可能性により変更。

こんな感じかな？

意外と長くなってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4580z/>

---

魔法少女リリカルなのは ～ 転生者によるIFな物語 ～

2011年12月25日12時54分発行